

ネパールの言語

特定非営利活動法人 ミランクラブジャパン
理事長 マナンドール マダーブ ナラエン

ネパールは多くの民族が住む国で共通言語（国語）はネパール語（カス語）である。しかし一つの国でありながら多くの民族が暮らすネパールではそれぞれ民族が全く違う母語（民族の言葉）で話す。

ミランクラブジャパンが支援している里子たちも多様である。里子たちは、タマン民族はタマン語、タル民族はタル語、ライ民族はライ語、マガル民族はマガル語、シェルパ民族はシェルパ語、ブラフマン、チェットリ民族はカス語、ネワール民族はネパール語（ネワール語）を話す。ネワール民族が話すネパール語は国語のネパール語とは違う。昔、カトマンズ盆地はネパールと呼ばれていて、ここに住むネワール民族が喋る言葉がネパール語と呼ばれていたのである。

昔のネパールは24の国々から成り立っていて、当時はそれぞれに24名の支配者がいた。1768年から1772年にかけてブリトビ・ナラヤン・シャハ王一族（カス語を使用する民族）がこれらの国々を統一し、首都を現在のカトマンズに定めた。その後、国名をネパールそして共通語はネパール語（カス語）とした。

2011年の国の統計のよるとネパールには126の民族、123の言語があるとされている。国の北部は約4000m～8848mのヒマラヤ山脈がそびえ立ち国土面積の15%を占める。中部は国土の68%を占める丘陵地帯と低山ヒマラヤで4000mまでの地帯である。盆地も多くあり、山を越えると次の盆地に入る。カトマンズ盆地もそ

の一つである。国の面積の3分の2以上は万年雪のヒマラヤ地帯と山岳地帯である。そして南部は亜熱帯気候で約70m～300mの肥沃な平野が広がる。今でこそ交通の便は良くなっているが、それでも国土の多くを占める山々によって各民族の交流は少ない。各民族をつなぐ共通語を学ぶためにも学校教育はとても重要な役割を果たす。ネパール語（カス語）が公用語になってからは、教育はネパール語で行われている。しかし田舎に住んでいる学校教育を受ける機会がなかった高齢者は共通語を話せる人は少ない。彼らとの会話は通訳人が必要となる。

また、独自の文字を持つ民族もあり母語は喋れても読み書きができないという問題も起こってきている。

ネパールは最近王政から民主化になってからは母語を大事にしようと教育の現場でも母語を学べるよう模索している。

またグローバル化の時代に合わせ子供たちが小さい時から英語が勉強できるようにと国が推奨している。

学校へ行っている子供は母語とネパール語、英語が喋れるようになっている。また隣国インドの影響（映画、ドラマ、小説、雑誌、民間の往来）で自然とヒンディー語ができる人も多い。

中世に建造された多くの世界遺産はカトマンズ盆地にある。これらの遺産の歴史や多くの遺文はネワール語で書かれており、ネパールについて研究する学者は、ネワール語からの翻訳が必要となる。